

## 大切なあの子

一宮東部小・6 市丸 華蓮

「あつ。」

「プシュー。」

音を立てながら、どんどんしぼんでいくあの子を見て、しまった、と思った。こんなことになるなんて。お母さんたちにおこられる。でも、自分で直せる気がしない。どうしよう。妹のせいにして、お母さんに何も言わないでこうかと思った。でも、さっき声を出してしまつて、お母さんがこつちを見ている。言わないわけにはいかない。

「どうしたの。」

お母さんは、不思議そうな顔をして、リビングからおもちやがたくさん置いてある部屋にいる私に向かって、声をかけてきた。

「あ、あのさ。」

もうにげられない。私は意を決して言った。

「なんかさあ、こんなになっちゃった。」

どんどんしぼんでいくあの子をお母さんに見せた。

いつもなら、

「もう。何してるの。貸して。」

とおこりながらも、おもちやを直してくれるお母さんが、

「あつ。もうだめだ。捨てるしかないね。」

と冷たい表情で言ってきた。

「えっ。」

いつもとちがう反のうに、私は固まってしまった。あの子とは、オレンジ色のロディ。大きさは、五十センチメートルくらい。またがって乗ることができて、バランスボールのようにびよんびよんはねることができるとおもちゃ。お母さんが昔から大好きで、私が生まれて大きくなったらプレゼントしてあげたいと長年思っていたそう。それで、私が一才の誕生日にプレゼントしてくれた。一才のころは、大きくて乗ることができなかったが、身長がのびて、またいでも足がつくようになると、ぴよんぴよんはねて、部屋中をたび回ったり、ままごとの相手役になったり、ヒーローごっここの敵役になったりもした。友達が遊びに来たときは、うらやましがられて、帰るまでずっと乗っていた子もいた。私の自まんのロディだった。妹が生まれて大きくなってきたころには、乗り方を教えてあげたり、一緒に二人乗りして遊んだりした。でも、だんだんとその存在が忘れられ、いつの間にか妹にシールをべたべたと全身にはられ、かげがうすくなつていった。

そんなある日、事件が起きたのだ。ふと目に入ったロディを何気なくさわっていて、

「そうだ。ちよつとやってみよう。」

と机に置いてあつたくしでロディをつついて遊んでみたのだ。何気なくつついていただけだったが、うすくなつて穴が開きそうになっていたところに、そのくしをさしてしまった。まさか穴が開くなんて思わなかった私は、何が起ったのかよく分からなかった。でも、すぐに自分が穴を開けてしまったことに気づいた。

「捨てるの。」

と聞く私に、

「そうだよ。だって穴が開いたら、こういうおもちゃは元通りにならないから。セロハンテープではったところで、丸みがあるから、ちゃんとふさがらずに少しずつしぼんでいつちやうんだよ。浮き輪に穴が開いたのと同じだよ。パンパンにふくらませて、数時間後にはふにやふにやになっちゃうから。」

と、お母さんはどなるわけでもなく、あきれるわけでもなく、少しさみしそうな表情で言った。

こんな小さな穴で使えなくなるなんて、思ってもみなかった。しかも、お母さんにも直せないなんて。私は、取り返しのつかないことをしてしまった。

「どうしよう。どうしよう。でも、絶対に捨てたくない。」

そこで私は、毎日空気を入れていけばいいことに気づいた。そして、いつものロデイになると思い、お母さんに提案した。

お母さんはしばらく考えて、

「お母さんだって本当は捨てたくないよ。大事なものだもん。本当に毎日できるの。」

と言った。

「もちろん。やるよ。」

とやる気満々で答えた。

空気入れを持ってきてもらって、空気を入れると、今までと同じように、乗り心地ばつぐんのいつものロデイになった。穴が開いてしまったところも、セロハンテープでしっかりと止めた。もう大丈夫だ。

しかし、次の日の朝。ロデイを見てみると、ふにやふにやになっ

て一人では立っていられず、横たわっていた。お母さんの言う通りだった。でも、空気を入れてまた復活するロデイを見て、私が毎日空気を入れれば大丈夫だと思っていた。でも、日に日に空気を入れるのがめんどろになってくる。学校からつかれて帰ってきて、宿題もやって、ロデイのことを忘れる日もあった。ふにやふにやになったロデイは、部屋の片すみに追いやられていった。

ある日、友達が遊びに来ることになった。ふにやふにやのロデイを見られるのははずかしいから、おし入れにしまうことにした。部屋にロデイがいなくなると、すっかりその存在を忘れてしまった。

そして、三年後のある日。お母さんにアイロンがけをたのまれて、おし入れを開けた。すると、あのときにぐちゃぐちゃにおしこんだロデイがいた。

「三年間、ずっとここにおしこまれていたんだ。毎日ふくらませようと思っていたのに、結局できなかった。ごめんね。ロデイ。」

でも、まだ捨てることはできない。だって、お母さんにとっても、私にとっても、本当に大切なものなのだから。だから、まだここにいてもらいたい。そう思い、ロデイのいるおし入れをそっと閉めた。